

---

# 少数精鋭！サブカル部

不憫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少数精鋭！サブカル部

### 【Nコード】

N9915Y

### 【作者名】

不憫

### 【あらすじ】

とある高校で廃部寸前だった下位文化研究部、通称“サブカル部”。

ギャンブラーの部長のダイチを筆頭に肥満体で読書家のジュン、いわゆるミリオタのシンジ、オカルト趣味があるチホ。

しかしその性質ゆえ、生徒や教師からあまり良い印象がなく、部員は教室で虐げられる存在になった。陰湿なそれに耐えきれなかった部員は次第に出席が少なくなる。

入学から半年、部長はある決意を……

## ブローグ

？「次にサッカー部の紹介です」

「ウォーッス！」

あまりの音量にスピーカーの音が割れる。新入生はドン引きだが、サッカー部の威勢の良さは有名だ。っていうかこいつら、マイクいらないんじゃない？……。

「それでは、3年生が今からリフティングをします！　お願いしまっす！」

そう言つと、体育館の入り口が開き、ガタイの良い男子生徒が駆け足で入ってきた。

これまで、身体検査で引つ掛かった事はないが、健康的な我が目を疑わざるを得なかった。こいつらには中学生も真つ青だろう。

サッカー部の連中は泥の付いたスパイクで入場し、そのまま汚れているボールを足で操り出したのだ。後片付けの担当であろう生徒会の人は顔がひきつっていた。

いや、寧ろ覚える手間が省けていい。こんな感じだ。

こいつらは、クソ。もしくは、クズ。あるいは、カス。

残念な事に、その凶行を止める者は居なかった。白髪にくたびれた灰色のスーツを纏う、ただ一人を除いて。

「あー、こらこら、ちゃんとした靴で上がらないとダメだよ。

あー、そもそも、体育館で室内シューズ以外の使用は校則で禁止されているはずだ」

ああ、なんと素晴らしい先生か。他の教師が生徒達の評価からビビって　何せ学校に親が乗り込んでくる時代だ　注意できない中、いかにも大人しそうな方が注意をする。

残念ながら上級生からのブライニングが飛び交ったが、老教師は確かな声で続ける。

「僕はね、えー、君たちサッカー部が嫌いと言っている訳じゃない。

この学校が大切だから言ってるんだ」

しかし、彼らはにやにやしながらボールを蹴り続けている。こいつら……。目上の方が注意しているのに止めないとは皆さんは貴族ですか？ 平安貴族ですか？ 蹴鞠でもやってるんですか？

野次も加熱し、さすがの堅物もそろそろ折れるかと思ったその時、「おい、貴様らぁ！ 話聞かなかったこと後悔させたるか！ 母ちゃんに泣きついてても遅いぞ！」

マイクを使っていないはずなのに、初めの挨拶に勝る怒号を飛ばした。後日談になるが、最前列で居眠りをしていた者は和太鼓の演奏でも始まったのかと錯覚したという。現に、30に及ぶクソ・クス・カスもボールを溢したり、明後日の方へ飛ばした。

余りの迫力に全校生徒が目を見開いていると親愛なる貴族ご一行は2年生を残し、悪態をつきながら退場した。生徒会は心の中で下品なジェスチャーをしていたに違いない。腕章を着けた男子が控え目に、しかし素早く親指を下に向けるのを見て確信した。

そうして取り残されてしまった金魚のフンは、部活動の実績について粗方語り終えると一礼して退場した。

あの先生に付いていてもいいな。今の時代にしては珍しい先生だ。是非教えを乞いたいところだ。

余談だが、一番新しい成績は4年前のものだった。

「では、最後に文化部お願いします」

文化部も運動部も、1通り説明は終わったが、特にめばしい部活は無かった。高校に入ってから陸上を続ける気は全く無かったし、文化部に期待していたのだが特に魅力的ではなかった。

「こいつはストレートだな……」

「文化、というよりサブカルについての部活ですね。実は数年前に新聞で取り上げられていて、僕もそれを読んで」

隣に座っていた太目の男が話しかけてきた。同じ歳だろうが、俺よりも1回り大きい。それを加味してもこの発汗量は異常だが……。

「ああ、サブカルチャー」

首を男の方向に捻って適当に返事をする目を前に向けた。といっても、俺の趣味と言えば賭け事くらいだ。今となつては机を囲む仲間も居ないが。暇さえあればトランプきって、部活中でもポーカ―やってたな……。

「あー、文化部です」

中学の頃の思い出に浸っていると文化部の活動紹介が始まっていた。さて、どんな先輩かな？

「えー、僕が文化部顧問の内村です」

前に出てきたのは先程、強烈な説教を実行した先生だった。

「文化部はー、今のところ活動しておりません。2年前のー、あー、先輩方は文化祭に展示物をしてました」

落ち着いているのか緊張しているのかよくわからない口調で続ける。

「今年中に、えー、何かを展示するというのは難しいと思います。1年間は表立つ活動は何もできません。それと、あ、部員も部長も募集中です。入部届けとか面倒だけど一応書いてきてね。結構大事だから。以上です」

他の部活のように資料を出したりはしなかったがそれだけ言うとそのくさくと教師用の席に戻っていった。

「お、面白そうですね、文化部。入部しようかな、というかそのつもりで入学したんですけど。僕は淳って言います。あなたは」

さっきの男が早口で言い終えたので少々驚きながらも、名乗っておくことにした。

「俺は大地。俺も入部するつもりだ、よろしく」

それが6ヶ月も前の事だった。今や文化部は4名、少数精鋭つて  
とこだな。

## プロローグ（後書き）

つまりは「冴えないオタク達が決起して、自分達をバカにした人々を見返す」お話です。コメディでやっていきたいです。遅筆ゆえ、更新ペースはゆっくりです。誤字脱字がありましたら報告お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9915y/>

---

少数精鋭！サブカル部

2011年11月29日22時45分発行